# 合い言葉は、“それって、ファンキー？”

2011年のN-BOXを皮切りに、Hondaの「N」シリーズは多様な価値観に応えるラインアップを展開し、
多くのお客様からご支持をいただいてきました。
それを可能にしたのは、軽自動車の概念には収まりきらない革新のプラットフォームにほかなりません。
2013年11月に市場に投入したN-WGNでは、軽に求められる価値を全方位で追求した、とことんマジメな軽づくりに取り組みました。
そこで今回は、とことん遊び心を持って、今までの「N」シリーズとは全く異なる、型破りな「N」をつくりたいと思ったのです。

きっかけは、エクステリアデザイナーが遊び半分で描いた一枚のスケッチです。
そのスケッチはN-BOXのルーフを削って低くしたサイドビューで、彼はそれを開発室のホワイトボードに貼っておいた。
すると、「何これ？カッコいいじゃん！」という連中が、次々と出てきたんです。
勢いとは恐ろしいもので、インテリアも描かれ、開発の予定はないのに原寸大のモックアップまでつくってしまった。
やがて役員の目にもふれ、「カッコいい！」「オモシロい！」ということで、量産することになったのです。

これは「どんなユーザーに向けて、どんな商品をつくるか」という商品企画からではなく、
たった一枚のスケッチからスタートした量産化で、通常の開発では考えられない、まさに型破りな出発点といえます。
当然のことながら、開発が進むにつれて色々な要件が出てきて、最初の尖った部分はなくなっていくのは目に見えていました。
そこで私は開発責任者という立場でしたが、チームみんなの最初の想いをカタチにできるよう、サポート役に徹したのです。

出発点が型破りなんだから、とことん型破りを貫こう。そんな想いを込めて“ファンキー”を合い言葉に開発がスタートしました。
判断基準は、“ファンキー”（＝型破り）か否か。“ファンキー”でなければ、このクルマをつくる意味がない。
そんなノリで、当初の勢いが失速することなく、むしろ加速し続けてN-BOX SLASHを完成させました。
このクルマは、チームが一丸となって、とことんマジメに遊びながら、つくりたいモノをカタチにした一台です。
果たして、どんなお客様が私たちの“ファンキー”なハートを受け止めてくれるのか。
ドキドキワクワクしながら、N-BOX SLASHを送り出します。

開発責任者
浅木 泰昭（あさき やすあき）
（株）本田技術研究所　執行役員

1981年、（株）本田技術研究所入社。エンジンテストグループに配属され、翌年、F1第二期参戦へ向けた立ち上げから携わる。エンジンテストPL、インスパイアLPL代行、ニューモデル企画等を経て、2011年、Nシリーズ共通プラットフォームのLPLを担当。N-BOX、N-BOX ＋、N-ONEに続き、N-BOX SLASHのLPLを務める。趣味は釣り、ゴルフ、温泉めぐり。愛車はN-BOX ＋。